

B-5

日本語における無助詞の機能と私的・公的表現性

山田祥一（北海道教育大学）

並木翔太郎（筑波大学大学院）

1. はじめに

・分析対象：無助詞文（助詞「ガ」/「ハ」相当のみ）

- (1) a. あ、バス ϕ 来た！ (cf. バスが来た)
b. 太郎 ϕ まだ未成年か。 (cf. 太郎はまだ未成年か)

- (2) a. * 山下 ϕ 悪いんだ。ちゃんと連絡してないから。 (加藤 2003:349)
b. * 僕 ϕ 行くけど、山田 ϕ 行かないよ。 (加藤 2003:338)

- (3) 先行研究では、聞き手への談話的効果が分析の中心であった (尾上 1987, 甲斐 1991, 1992, 長谷川 1993, 加藤 2003, 高見・久野 2006, 岡田 2015, 等; cf. 筒井 1983, 丹羽 1989, Lee 2002)。

- (4) 話し手の二つの側面 (Hirose 1995, 2000, 2002, 廣瀬 1997, 廣瀬・長谷川 2010)

- a. 私的自己：聞き手を必要としない思考の主体
b. 公的自己：聞き手と対峙する伝達の主体

- (5) a. 雨だ。 [私的表現]
b. 雨{だよ/です}。 [公的表現]

- (6) 日本語は私的自己中心言語である。すなわち、本来的に思考表出的であり、他者への伝達を意図する場合、相応の言語形式で伝達性を保証する必要がある。

- (7) [独り言にて]

あの人 ϕ 大丈夫かな。 (廣瀬・長谷川 2010:152)

- (8) a. 花子はバス ϕ 来たと言った。
b. * 花子はバス ϕ 来たと伝えた。

- (9) 無助詞文自体は、本来的に聞き手への伝達を保証する表現ではない。

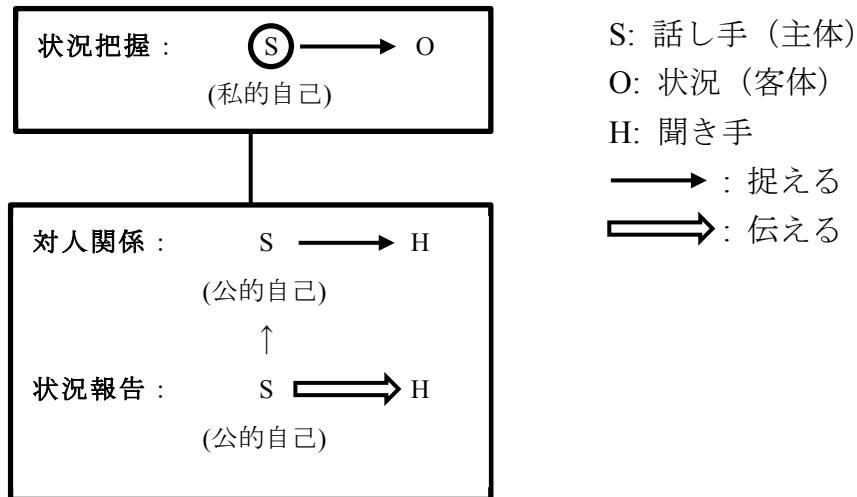
目的

- (10) 私的表現としての無助詞文の機能的特徴を明らかにする。

2. 日本語の言語的特徴

- ・ 言語使用の三層モデル (廣瀬 2012, Hirose 2013, 2015)

(11) 私的自己中心の日本語



(廣瀬 2012:3)

- (12) 助詞は状況把握層に関わるリソースであるため、助詞の有無は私的自己である話者の状況把握における何らかの差異を表出する。

3. 提案

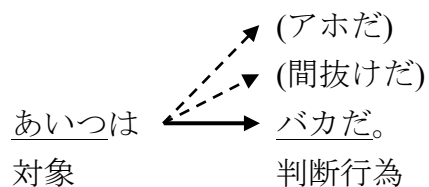
主張

- (13) 無助詞文の機能的特徴 :

無助詞文は、話者がある状況に没入することで、その状況をより主観的に捉えていることを表出する。

- ・ 有助詞文との比較

(14) a.



b. あいつ ϕ バカだ。

- (15) 無助詞文は、当該状況のみに意識を向ける (cf. Lee 2002)。

(16) 主観的把握の度合い

項の省略 > 無助詞文 > 有助詞文
~~バスが~~来た バス~~が~~来た バス~~が~~来た

4. 証拠の提示

4.1. 状況への反射的反応

- (17) a. うわ、地震{ ϕ /??が}きた！
b. あ、静電気{ ϕ /??が}きた！
c. 足{ ϕ /??が}いってえ！

(18) 切迫した状況では、話者が当該状況に没入しているため、無助詞文が選択される。

- (19) a. [外に出て雨が降ってきた瞬間の発話]
あ、雨{ ϕ /?が}降ってきた。
b. [テレビで外の録画映像を見ている場面]
あ、雨{? ϕ /が}降ってきた。

4.2. 総記・対比の解釈

- (20) a. * 山下 ϕ 悪いんだ。ちゃんと連絡してないから。 [総記]
b. * 僕 ϕ 行くけど、山田 ϕ 行かないよ。 [対比]
(= (2))

(21) 総記・対比の解釈では、話者が複数の対象を参照した上で1つを選択するという論理的判断が伴う。

(22) 状況に没入した話者は、他の対象を参照することはできない。

4.3. 客観的事実・知識

- (23) a. ?? スカイツリー ϕ 634 メートルだ。
b. ? 象は鼻 ϕ 長いと言われている。

(24) 客観的事実や一般的知識を表す際、無助詞文は選択されない (高見・久野 2006)。

- (25) a. 確かに、象は鼻 ϕ 長いわ。
b. へえー、スカイツリー ϕ 634 メートルなんだ (あ)。

4.4. イ落ち構文

- (26) a. おじいちゃん{ ϕ /*が/*は}若っ！
b. これ{ ϕ /*が/*は}うまっ！

(今野 2011:8、一部修正)

- (27) イ落ち構文の機能的特徴：

話者が、眼前の事態や対象に対し、瞬時的現在時の直感的な感覚や判断を表出する私的表現行為専用の構文である。

(今野 2011:21)

- (28) a. それ{ ϕ /*が/*は}ウケるー。
b. それ{ ϕ /*が/*は}わかるー。

5. 公的表現における無助詞文

・公的表現

- (29) a. [PUB <PRIV EXP(RESSION)₁ > EXP₂].
b. 私的自己が把握した状況を、対人関係に考慮した上で、伝達性を保証する有標の表現（終助詞の「ね」や「よ」、丁寧の助動詞「です」など）を用いて、聞き手に伝達する。
c. 私的自己中心言語は、「自分に分かっていることは言わない」という特徴がある (cf. 話し手基盤の原則 (Horn 1984))。

- (30) 対話では、話者と同様の状況把握を聞き手に求めることを含意する。

予測

- (31) 聞き手が「状況に没入したより主観的な状況把握」を求めるに値しない場合、無助詞文の使用は語用論上不適格となる。
a. 聞き手が不特定多数の場合 (cf. 長谷川 1993)
b. 聞き手にとって話者と同様の状況把握が負担になると想定される場合
c. 聞き手と心的距離が遠い場合

・(31a) について

- (32) a. [特定の人に対して]
電車{ ϕ /が}来ますので、黄色い線の内側までお下がりください。
b. [駅のアナウンス]
電車{が/* ϕ }参ります。黄色い線の内側までお下がりください。

(cf. 長谷川 1993)

・ (31b) について

- (33) a. [聞き手が話者に息子がいることを知らない場面]
いやー、息子{?? ϕ/が}風邪をひきましてね。
b. [聞き手が話者に息子がいることを知らない場面]
いやー、うちの息子{ϕ/が}風邪をひきましてね。

・ (31c) について

- (34) [ホテルマンから今日あったばかりの客に対して]
山田様、お車{が/?? ϕ}到着しました。

- (35) a. [友人に対して]
ねえ、はさみ{ϕ/?は}ある？
b. [初対面の相手に対して]
すみませんが、こちらにはさみ{は/?? ϕ}ありますでしょうか？

(cf. 甲斐 1991, 1992)

(36) 聞き手への親しみ (筒井 1983、Lee 2002 他)

対話における無助詞文の使用は、くだけた表現であるがゆえに、聞き手への親しみが含意される。

(37) 本発表における「聞き手への親しみ」の分析

話者と同様の状況把握を聞き手に求めることは、聞き手との心的距離が近いことを含意することから、親しみの含意が生じる。

6. まとめ

参考文献

- 長谷川ユリ (1993) 「話しことばにおける「無助詞」の機能」, 『日本語教育 80 号』, 158-168.
Hirose, Yukio (1995) “Direct and Indirect Speech as Quotations of Public and Private Expression,” *Lingua* 95, 223-238.
廣瀬幸生 (1997) 「人を表すことばと照応」, 中右実 (編) 『指示と照応と否定』 (日英比較選書第 4 巻) 1-89, 研究社, 東京.
Hirose, Yukio (2000) “Public and Private Self as Two Aspects of the Speaker: A Contrastive Study of Japanese and English,” *Journal of Pragmatics* 32, 1623-1656.
Hirose, Yukio (2002) “Viewpoint and the Nature of the Japanese Reflexive ‘Zibun’,” *Cognitive Linguistics* 13, 357-401.
廣瀬幸生 (2012) 「主観性と言語使用の三層モデル」, 言語と(間)主観性研究フォーラム.

- Hirose, Yukio (2013) “Deconstruction of the Speaker and the Three-Tier Model of Language Use,” *Tsukuba English Studies* 32, 1-28.
- Hirose, Yukio (2015) “An Overview of The Three-Tier Model of Language Use,” *English Linguistics* 32-1, 121-137.
- 廣瀬幸生・長谷川葉子 (2010) 『日本語から見た日本人』, 開拓社.
- Horn, Laurence R. (1984) “Toward a Taxonomy for Pragmatic Inference: Q-Based and R-Based Implicature,” *Meaning, Form, and Use in Context: Linguistic Applications*, ed. by Deborah Schiffrin, 11-42, Georgetown University Press, Washington D.C.
- 甲斐ますみ (1991) 『は』はいかにして省略可能となるか, 『日本語・日本文化』7, 113-127, 大阪外国語大学.
- 甲斐ますみ (1992) 「話者が『は』『が』なし文を発するとき」, 関西言語学会第12回大会口頭発表.
- 加藤重広 (2003) 『日本語修飾語構造の語用論的研究』, ひつじ書房.
- 今野弘章 (2011) 「イ落ち: 形と意味のインターフェイスの観点から」, 『言語研究』141, 5-31.
- 久野暲 (1973) 『日本文法研究』, 大修館書店.
- Lee, Duck-Young (2002) “The Function of the Zero Particle with Special Reference to Spoken Japanese,” *Journal of Pragmatics* 34, 645-682.
- 丹羽哲也 (1989) 「無助詞格の機能 -主題と格と語順-」, 『国語国文』58-10, 38-57.
- 尾上圭介 (1987) 「主語にハもガも使えない文について」, 『国語学』150, 48.
- 岡田春奈 (2015) 「助詞なし名詞句の意味機能」, 日本語文法学会第16回大会口頭発表.
- 高見健一・久野暲 (2006) 『日本語機能的構文研究』, 大修館書店.
- 筒井通雄 (1983) 「『ハ』の省略」, 『月刊言語』13-5, 112-121, 大修館書店.